

「サハラ以南のアフリカ」と向き合う

山形県立鶴岡中央高等学校 百瀬 和重

1. はじめに

『ドリトル先生 航海記』（ヒュー・ロフティング作，伊達常雄・文，集英社）。私の8回目の誕生日祝いとして叔父と叔母からもらった本。ドリトル先生は動物と話せる医者で，世界中を旅しながらさまざまな活躍をするすてきな人。何度も読み返し，今もなお手元にあるこの本が，地理の教員になる原点であったなんてことを考えてみる（生物学者でも医者でもなく，先生に似たのは，太ったところだけか）。

さて，今回の授業は「サハラ以南のアフリカ」を取り上げる。ドリトル先生とアフリカは直接関係ないが，「暗黒大陸」とよばれ，ヨーロッパ諸国による分割の対象だったこの地域が，現在は「地球最後のフロンティア」とよばれる経済急成長地域になっている。われわれがもつアフリカ観はどのようなものだろうか。今回の授業では，アフリカへの偏見や思い込みに気づくことから始め，異文化理解につなげたいと思う。地方の人口10万都市とアフリカの結びつきを通して，アフリカと日本，そして自分たちの暮らす地域の理解までつなげることを大きな目標にしたい。

2. 地域紹介・学校紹介

山形県鶴岡市。山形県の西北部に位置し，人口は13万2000人（2015年6月末）である。出羽三山・赤川・庄内平野・日本海という豊かな自然の恵みを活かした農林水産業がさかんな都市である。

鶴岡中央高校。1998年に創立。普通科3クラス，総合学科4クラスの全21クラスである。今回授業を行う総合学科は，「国際交流系列」・「情報科学系列」・「家政科学系列」・「社会福祉系列」・「美術・デザイン系列」の五つの系列があり，専門的な学力と高いスキルを養成している。

3. 単元構成

今回の実践では，表1のように単元を構成した。それぞれの時間のねらいや留意点も表に示した。

それでは，それぞれの内容について紹介していきたい。

表1 単元構成表

1時間目	イメージする 素朴で単純なイメージでよい。知っていることを書き出す。数多く出させることが主眼なので，話し合いも可にする。
	探す 普段使用し，身近にあるもの（新聞・テレビ・本）から探す。アフリカに関する情報が少ないことを実感させる。
2時間目	調べる 作業を通して，アフリカの大きさを把握させる。山形の自然環境についても併せて確認させる。
3時間目	つくる 国旗をつくる作業を通して，親近感を生み出す。絵やデザインの得意な生徒の活躍の場という意味もある。
	読む 教科書以外の資料で，イメージ以外のアフリカの一面を発見させる。生徒に多くの情報を与えたいが，時間配分の工夫が必要である。
4時間目	会う 人と会うことでアフリカというひとくくりのイメージがどうなるのか。会う・聞く・話すの重要性を体感させる。
5時間目	考える アフリカとのパートナーシップを自分の学びと連動して考察させる。支援だけでなく，同じ目線でできることを想像させる。
	食べる アフリカと自分が食べ物を通してつながっていることを実感させる。今後もアフリカとの関係を前向きで意欲的にとらえさせるねらいもある。

（1）イメージする 《1時間目》

アフリカはどんなイメージだろう？

◆暑い◆黒人◆貧困◆砂漠◆途上国◆戦争・紛争◆太陽◆自然が美しい◆雨が少ない◆緑が多い◆チョコ◆バナナ◆怖い◆身体能力が高い◆スタイルがよい◆視力がよい◆イスラム国◆格差が大きい◆マラソンが速い

★まず，この問いかけから開始。多くの生徒のイメージが否定的で後進的。自然やスポーツには肯定的。

（2）探す 《1時間目》

新聞のテレビ欄からアフリカを探してみよう

●自然「サファリ」「ナイル」●日本人が暮らす国「エジプト」「エチオピア」●娯楽「アフリカの歌姫」●学習『NHK高校講座 地理』●ニュース「チュニジアのテロ」●スポーツ「サッカー・日本対チュニジア」等々。

★1人1人にある日の新聞を渡し，調査。アフリカや知っている国の名前があれば印をつける。メディアから得られる情報がそもそも少なく，印がつかない。

学習センター（図書館）にあるアフリカ本を探そう

●自然『滅びゆくアフリカの大自然（黒田睦美，黒田弘行著/ポプラ社）』『アフリカの野生動物誌（黒田弘行著/旬報社）』

●歴史『アフリカの植民地化と抵抗運動（岡倉登志著/山川出版社）』『世界の歴史24 アフリカの民族と社会（福井勝義ほか著/中央公論社）』●図鑑『アフリカを知る事典（伊谷純一郎ほか監修/平凡社）』『写真でみる世界の子どもたちの暮らし（ベニー・スミス、ザハヴィット・シェイレブ編著、赤尾秀子訳/あすなろ書房）』●紀行『アフリカよ、キリマンジャロよ－自転車野郎の冒険記（池本元光著/サイマル出版会）』『アフリカを食べる（松本仁一著/朝日新聞社）』●新書『アフリカ・レポート－壊れる国、生きる人々（松本仁一著/岩波新書）』『現代アフリカ入門（勝侯誠著/岩波新書）』●文庫『日本人が知っておきたい「アフリカ53カ国」のすべて（平野克己監修、株式会社レッカ社編著/PHP研究所）』等々。

★図書館で探す。当校は新しいが、蔵書は古い。290番(地理・地誌・紀行)を中心に探す、時間内に探せず、ようやく図鑑で見つける生徒もいた。



写真1 探す(学習センターにて)

(3) 調べる 《2時間目》

地図でアフリカと山形県の自然の比較をしてみよう

表2 アフリカと身近な自然の比較

名称	長・高・広	特色
ナイル川	6,695km	世界最長・流域11か国
最上川	224km	山形県の母なる川
キリマンジャロ山	5,895m	アフリカ最高峰
鳥海山	2,236m	山形最高峰・出羽富士
サハラ砂漠	907万km ²	世界最大
庄内砂丘	55km ²	日本三大砂丘とも
ヴィクトリア湖	68,800km ²	世界3位・ナイル源流
上池・下池	12ha, 26ha	2008年ラムサール条約登録
マダガスカル島	59万km ²	世界4位
飛鳥(とびしま)	2.5km ²	人口226人(2015年3月末)

〈出典〉『理科年表 平成26年』、『山形県勢要覧 平成27年刊』山形県統計企画課、『酒田の自然』酒田市教育委員会

アフリカ大陸と面積の大きな国を比べよう

表3 アフリカ大陸と各国面積の比較(2012年)

名称	面積(万km ²)	人口(万人)
アフリカ大陸	3,031	108,352
ロシア	1,710	14,305
カナダ	999	3,488
アメリカ合衆国	963	31,391
中国	960	138,173
ブラジル	852	19,394
オーストラリア	769	2,268
インド	329	121,337
日本	38	12,756

〈出典〉Demographic Yearbook,ほか

アフリカ大陸の自然をまとめよう

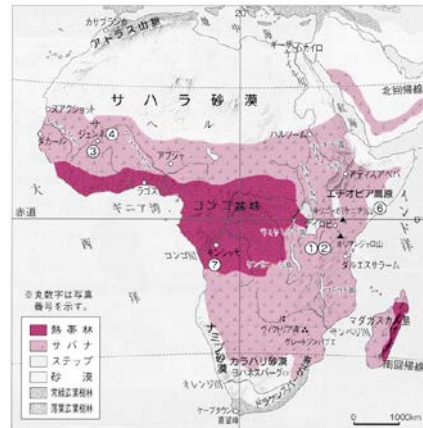


図1 『高等学校 新地理A』p.103 アフリカの自然環境

★『高等学校 新地理A』p.103「アフリカの自然環境」(図1)と『地理・地図資料』2013年度2学期①号の「ステップアップワークシート⑱」を利用しながら、作業をする。このワークシートのウォーミングアップ!や前出の表2・3の国名や地名を答える(表の太字を書く)。『新詳高等地図』p.1~3を見せながらミラー図法の特徴(高緯度ほど面積拡大)も話し、アフリカ大陸はロシアよりも広いことを確認。

(4) つくる 《3時間目》

アフリカにある国の国旗をつくろう



写真2 アフリカの国旗をつくる生徒たち

★形になるものをつくり遠いアフリカに少しでも近づく作業。併せて、国の特徴(データから国の強みと課題)を調べ、国旗の後ろに書き出す。

(5) 読む 《3時間目》

『ルワンダの祈り』を読もう

★この本は、仙台出身のジャーナリスト後藤健二さんが、ルワンダでの取材をまとめ、2008年に発行したもの。ルワンダで起きたジェノサイド(大虐殺)後の国情をとくに女性の立場からレポートしている。なお、後藤さんは今年、過激派組織ISIL(イスラム国)により殺害された。

「最後のフロンティア・経済成長の要因」を知ろう

★『現代社会へのとびら』2013年度3学期号「地図でみる現代社会」宮崎猛「最後のフロンティアーアフリカの経済成長とその課題」を参照する。ここで要因としてあげられているのは、①紛争の減少・民主化による援助や投資の増加②政情安定にともなうマクロ経済運営の改善③新興国の需要増による資源価格の高騰（鉱物資源のみならずコーヒーやカカオなどの伝統的なものや、花、野菜などの非伝統的な商品の輸出も伸びた）の3点。

『日経ビジネス』のアフリカ特集で今のアフリカを知ろう

★「ナイジェリアでつけ毛」・「ナイジェリアで3人乗りバイク」・「ケニアで中古車」・「ウガンダで消毒液」・「ルワンダでソフト制作」・「エチオピアの保険（旱魃対策）」・「南アフリカ共和国でボールペン」などの例をあげ、「支援」から「投資」という変化の一片を把握する。

(6) 会う <<4時間目>>

アフリカ・ルワンダの人に会おう

カゲンザさん（左）とウィリアムさん（右）

（ルワンダ出身）山形大学農学部留学生（JICAのプログラムによる）。農業はもちろん、環境学や経済学などを研究中。当日は、シマウマとレパードの衣装で登場してくれた。



写真3 交流授業のようす

プレゼンの内容 ◆山や丘が多く湖がたくさん◆気温は12℃～27℃で過ごしやすい◆コーン・米・ナッツ・豆・いも・バナナ・キャッサバ・コーヒー・茶・やぎをおもに栽培・飼育◆農業は手作業が多い◆お金がなくて学校に行けず、重労働の子どもがいる◆学校に行ける子どもは1人1台パソコン◆裕福な家庭の子はルワンダ語・英語・フランス語を話す◆1人の先生が60人の生徒を見る・先生や医師が少ない◆ジェノサイドがあった◆首都キガリに虐殺記念館がある◆フェイスブックなどのSNSで友人と連絡がとれる◆毎月最終土曜日に若い人を中心にボランティア活動を行う

生徒の感想 ◆勝手なイメージで、ビルなど一つもないと思っていた◆言葉の一つしか話さないのはもったいないと言

われショック◆砂漠だらけで水を遠くまで汲みに行くイメージだったが、すごく発展していてきれいな国だ◆Wi-Fiの普及も進んでいると聞いて驚いた◆2人と握手できてよかった◆英語をがんばりたい◆何よりカゲンザさんとウィリアムさんと実際に会ってみて感じた印象が明るく温厚な感じだったのでイメージがだいぶ変わった◆寿司が好きだということで味覚の共有もできた◆20年前の大虐殺を15歳の頃に体験したことは、日本で戦争を体験した人がだいぶ少なくなってきたのと違い、彼ら自身に体験者としてその歴史を伝えていかなければならない責任があるというのはとても重く、大変なことだと思う。日本は自然災害を除けば、そういったことは比較的少ないわけだが、将来どうなっていくかは、誰もわからない。私たちが同じように何かを体験し、それが二度と起こらないようにするためにできることは何か。他の国がどうやって困難を乗り越えたかを知ることで、自分たちができることが増えると思う。世界を知り、目を向けていくことの大切さを改めて学んだ。

★この授業のクライマックスは、ある生徒の質問。「以前授業で映画『ホテル・ルワンダ』を見たが、あれは本当のことか」に対するカゲンザさんの答えは「私は『サバイバー』（＝ジェノサイドの生き残り）です。家族を殺されました。あの映画は、わかりやすくつくられたもので、主人公の人は現在はルワンダに住んでいません。私は真実を知っています」。なごやかな雰囲気が、一瞬ピーンと張り詰めた。次の質問「日本で好きな食べ物は何か」にカゲンザさんがニコやかに「スーシー（寿司）」と答え、教室はどっと大笑い。

★昨年は駐日ルワンダ大使が山形大学農学部を訪れ、講演会を開くなど定期的な交流を継続しているようだ。

アフリカ・ウガンダの人に会おう

スーザンさん

（ウガンダ出身）山形大学農学部留学生として来日。環境や水についての研究を行って4年目になる。さらに大学院まで進む予定。

プレゼンの内容 ◆かつてイギリスの植民地・チャーチルが「アフリカの真珠」と表現◆国旗の鳥（ホオジロカンムリヅル）は「前進」の意味◆民族衣装は結婚式だけ◆主食はキャッサバ・バナナ◆台所は家と離れている◆米は毎日食べない、鶴岡で毎日米を食べるのは大変◆雨季が4月頃、平均気温は20℃前後、冬はない◆1日2食（昼と夕方）◆ライオン・キリン・サイ・ゴリラが自然公園で暮らしていて、観光の材料◆人口ピラミッドは富士山型（日本と逆）

生徒の感想 ◆日本で嫌いな食べ物はないと言っていたの

でうれしかった◆自分のためより、国のためと言っていたのがすごい◆民族によってダンスの雰囲気違っておもしろい◆アフリカの堅苦しいというイメージが変わった



写真4 交流授業のようす

アフリカで活動したことのある鶴岡の人に会おう

渡部直人さん

(国際農業開発コンサルタント・鶴岡市在住) マラウイやスワジランドなど活動経験が豊富。授業の数日前までバキスタンのフンザで活動していた。



写真5 交流授業のようす

プレゼンの内容 ◆マラウイでは灌漑施設の開発に携わる。洪水で壊れることもあり、すべての事業がうまくいっているわけではない◆行ったから語れることがあると同時に、自分が体験したことしか語れない◆紛争をなくし平和な社会をつくりたいという思いでやっている◆若い人の発言がとても大事で、活躍に期待している。

生徒の感想 ◆(ずさんな調査で灌漑施設が壊れた話から) たくさんの物をつくるより質のよい物をつくるほうがよいこともある◆日本の支援が本当に役だっているのか◆平和のために戦争を始めたり、戦争をしたいと思ったりする人がいるということがわかった◆実際に現地に行くことで新しい発見があるので私も実際に「行く・見る・感じ取る」をしたいと思った。

(7) 考える 《5時間目》

普段学んでいることをアフリカの人とともにやってみよう

★各系列の特色を活かしてアフリカで(またはアフリカの人と)やるとしたら何ができるだろうかという問いか

け。援助から「投資・ビジネス」という発想へ転換を促す。

▼「国際交流系列」⇒「アフリカ体験型観光プログラム」の開発。▼「情報科学系列」⇒娯楽に費やすお金が増えるという予測で「アフリカ型テーマパーク」の開発▼「家政科学系列 被服」⇒原色のファッションセンスを活かした「シルク生地での服のデザイン」(当校と鶴岡市では市の伝統産業である養蚕業と連携した「シルクタウンプロジェクト」を実行中。市民が蚕を育て、地元企業が糸・布にして、本校生徒が縫ってファッションショーという流れ。市も地域の産業としてとらえ、予算組みし担当者をおき、支援している。)▼「家政科学系列 食物」⇒「ダダチャ豆(枝豆)などの在来作物」栽培への挑戦▼「社会福祉系列」⇒「ユニバーサルデザイン」の衛生用品(女性視点で)の開発。▼「美術・デザイン系列」⇒映画や音楽での文化の融合。

(8) 食べる 《5時間目》

★フェアトレード商品であるチョコレートを購入(鶴岡市の酒・食料を扱う小売店に輸入品としてある)。遠い異国の地のカカオ生産者に思いを馳せながら食べる。

4. まとめ

今回の授業でわかったことは、次の3点である。1点目は、生徒のアフリカ観が予想以上にマイナス的であるということ。これは流れる情報の不足に尽きる。ただ、生徒の知的好奇心は無限大なので、アフリカをどう近く感じ、どう付き合うのかを考えた今回の取り組みを継続させたい。2点目は、地方の人口10万都市でアフリカ出身の方が生活している現実に驚いたこと(出羽庄内国際村の全面協力に感謝)。本質に触れる機会がもつ重要性を再認識した。流れてくるものを待っているだけでは、貧困や紛争の話題に偏る。高大連携や行政・企業との連携をさらに利用していきたい。3点目は、自分たちがもつ思い込みが狭い視野から出るものであることに気づいたこと。「アフリカは遅れている」→「そうでもない」、「自分たちが暮らす地方都市には何もない」→「そうでもない」と、異文化を学ぶことで自分の認識を見つめ直すことができた。

※協力：公益財団法人 出羽庄内国際交流財団
(出羽庄内国際村・1994年～)

※参考文献

ヒュー・ロフティング(1973)『ドリトル先生 航海記』集英社
澁澤文隆編(2007)『心を揺さぶる地理教材2』古今書院
後藤健二(2008)『ルワンダの祈り 内戦を生きのびた家族の物語』汐文社
『日経ビジネス』2013年5月27日号 日経BP社
※本文中に登場する『地理・地図資料』『現代社会へのとびら』のバックナンバーは、弊社HPよりご覧いただけます。

トップ→定期刊行冊子はこちらから